

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の 教育



特集

子どもと新年

新連載

保育の中の物語

観察のまど

子どものにわ

好 評 発 売 中

フレーベル館創立100周年記念出版

倉橋惣三文庫 <全10巻>

倉橋に学び、保育を極める。

日本保育界の父と呼ばれ、現代保育に影響を及ぼし続ける倉橋惣三の主要著作、倉橋に関する評論・エッセイを集めた全10巻。

倉橋研究の第一人者・森上史朗の名著『子どもに生きた人・倉橋惣三』の改裝版

倉橋惣三文庫⑦

子どもに生きた人・ 倉橋惣三の生涯と仕事(上)



森上史朗／著

- 第1章 生涯
- 第2章 思想
- 第3章 児童福祉

10807

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

倉橋惣三文庫⑧

子どもに生きた人・ 倉橋惣三の生涯と仕事(下)



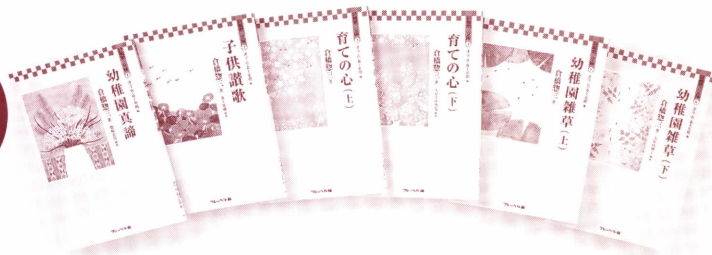
森上史朗／著

- 第4章 保育
- 第5章 家庭教育
- 第6章 児童文化

10808

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

好評発売中



① 幼稚園真諦

倉橋惣三／著 柴崎正行／解説

18×12cm 148頁 定価1,155円(税込)

② 子供讃歌

倉橋惣三／著 森上史朗／解説

18×12cm 236頁 定価1,260円(税込)

③ 育ての心(上)

倉橋惣三／著

18×12cm 180頁 定価1,155円(税込)

④ 育ての心(下)

倉橋惣三／著 大豆生田啓友／解説

18×12cm 244頁 定価1,260円(税込)

⑤ 幼稚園雑草(上)

倉橋惣三／著 柴崎正行／解説

18×12cm 276頁 定価1,260円(税込)

⑥ 幼稚園雑草(下)

倉橋惣三／著 上垣内伸子／解説

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

続刊予定

⑨倉橋惣三・その人と思想

⑩倉橋惣三と現代保育

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第108巻 第1号



乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第108巻 第1号

もくじ

巻頭言

「友達と一緒に」の再考

神長美津子

4

昆布巻きの話

立川多恵子

8

しあわせの記憶

すとうあさえ

12

昔遊びを楽しむお正月

私市和子

18

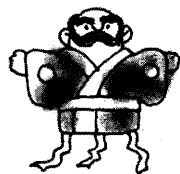
時の結び目ということ

鈴木禎宏

22

— 特集 —
子どもと新年





新 園長のまなざし

冬空をのぼるあなたへ 向山陽子 28

新 保育の中の物語

綱渡り、大成功 岸井慶子 30

新 観察のまど子どもにわ

最初の観察記録から 砂上史子 34

新 『幼児の教育』ネット公開に寄せて

『幼児の教育』ネット公開と 湯川嘉津美 40

幼児教育史研究の可能性 湯川嘉津美 40

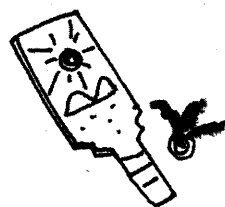
アキオとネーネと石 古賀松香 46

保育の現場から

五歳児の三学期 ～ ゆっくりと表現を楽しむ ～ 上坂元絵里 52

お茶の水女子大学「幼・保・太」連携保育研究の試み (26)

ミュンヘン市の幼保をつなぐ実践 浜口順子 58





巻頭言

「友達と一緒」の再考

神長美津子

幼稚園と小学校とのある合同研究会での話題ですが、小学校教師から、「幼稚園の指導計画には、『友達と一緒』という言葉がよく使われているけれど、小学校の指導計画ではほとんど使っていない。これは、小学校は友達と一緒に学習することを前提にして、授業を行っているからだろうか」と、ご自身の子どものかわりの反省の意味も込めて、疑問を投げかけられました。その話を聞き、人間関係を視点に幼小の教育を比較してみる切り口もおもしろいし、また「確かに」と思うところもありました。

友達と一緒

平成元年の幼稚園教育要領改訂で五領域の一つとして領域「人間関係」が設置されて以来、幼児教育では、子どもの視点から集団生活のルールや仲間関係が語られることが



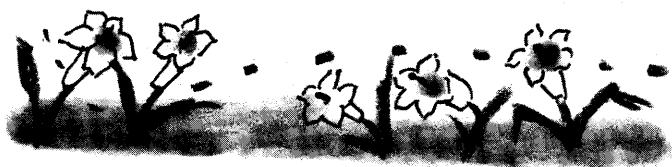
多くなり、人間関係の育ちをきめ細かにとらえるようになってきたと思います。

いろいろな園の指導計画を見ていても、子どもの中に育ちつつあるものをとらえて、ねらいや内容を設定していることに気づきます。たとえば、ある園では、入園したばかりの三歳児の場合は、まだ子ども同士のかかわりが少ないので、「友達」ではなく、「他の幼児」と表現した方がよいのではないか、また「友達と一緒」というよりは、「友達の中で」という表現がよいのではないかなど、そのつながり方に着目し、ねらいや内容を設定しています。子ども同士の関係ができた四歳児でも、まだ友達とのやりとりを楽しんでいることが多いので、「友達と一緒」という表現は難しいと考えています。さらに五歳児になり、共通の目的を見いだしながら活動するようになって初めて、「友達と一緒」という表現を使っていました。

問題は、その次の段階、小学校でどんな友達とのかかわりを期待して、幼児期の「友達と一緒」を考えるからです。「友達と一緒」が幼児期の中だけで語られ閉じてしまっていては残念ですから、その成果をどう小学校教育につなげていくかです。

人間としての成長という長い一生を見据えれば、幼児期は、ようやく友達と共有する世界をもち、さまざまなものや人とのかわりを楽しみながら、最終的に一人ひとりが自らの世界を広げていく時期です。まさにこの時期は、「友達と一緒」を通して新しい世界と出会い、学ぶことの楽しさを体験しています。

こうした学びの姿をとらえて、今回の幼稚園教育要領改訂では、子どもの発達や学び



の連続性を確保するための視点の一つとして、人とかかわりを深める中で、協同する経験を重ねることを取り上げています。新幼稚園教育要領の領域「人間関係」の内容の取り扱いには、「(3) 幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようになるとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること。」と示し、友達と共に新しい世界をつくりだす喜びの体験を大事にすることを述べています。

友達と共に新しい世界をつくりだす体験

人間関係をテーマとした研修などで、筆者は、ビデオ教材「わすれてできる?—友達と先生の暮らしづくり—」(文部科学省特選・岩波映像制作)をよく使用します。友達と先生との日々の暮らしの中で、揺れ動きつつも友達と新しい世界を共有し、共に楽しむ五歳児の姿をよくとらえているからです。

たとえば、「お集まり」の場面です。戸外で使った大型積み木を保育室に運んできた二人は、それを片づけてから、みんなと一緒に活動に参加するつもりでした。ところが、椅子を取りに行く途中に、飼育箱の小さな虫に目が止まってしまったのです。それは、朝、園に送られてきた小包である「森の贈り物」の中で見つけた小さな虫です。もうすでに、みんなは先生の周りに集まって歌をうたい始めていますが、二人だけは、体はみんなの歌に合わせてリズムカルに動かしながらも、手には虫を持って二人で見合っ



ています。その生き生きとした表情からは、さっきの小包の「森の贈り物」のお話の余韻に浸っているかのように思われました。また二人は、虫がどうしているかを確認したい気持ちが互いに通じ合っていることを楽しんでいるかのようにです。

二人が遅れてみんなの所に行くと、椅子を置く場所がありません。二人のうちの一人が強引に入ろうとして、他の幼児を泣かせてしまいました。その様子を見ていた担任は、いつになく厳しい口調で、「どうしたらみんなで気持ちよく暮らせるか、少し考えながら暮らして……」と話しかけています。その子はもちろんですが、周りの子どもたちも神妙な顔つきで、担任の話を聞き入っていました。それは、自分たちの暮らしにとって大事な問題として受け止めているからです。映像に映る子どもたちの表情からは、友達や先生の暮らしの中で起こる出来事の一つひとつに心が揺れ動き、友達とそれを共有しながら生き生きと活動する姿を読み取ることができました。ここには、確実に、友達と刺激し合い響き合う姿があり、共に学んでいこうとするクラスの雰囲気が育っています。

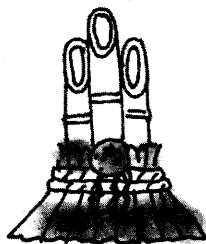
こうした関係は、たんに友達と一緒に活動すれば、また五歳児になればできるわけはありません。保育者が、子どもたちが行ったり来たりして「友達と一緒に」となっていく過程とじっくりとつき合い、互いに刺激し合い響き合う関係から協同的な学びが成立する過程をしつかり支えることが必要なのです。

特集

子どもと新年

昆布巻きの話

立川多恵子



子どもと新年という特集を組みたいというお話を聞いて、「おもしろそう、考えてみてもいいですよ」と答え、パソコンに向かいました。ところが、「子どもにとって新年とは……」といった根本的な問題にぶつかって仕事が進みません。近所の子に「Aちゃん、『新年』って知っている？」と愚問を發してしまいました。A子は首を横に振るばかりで

す。そこで今度はA子のお姉さんのB子に向かって、同じような質問をしました。B子はすぐ「新年って、新しい年のことでしょう。お正月のことよ。うちではデパートでおせち料理を買ってきて食べるの」と、話してくれました。

同じような質問を親戚のS夫（小学生）にもしてみしました。S夫は「新年、知ってるよ、お正月のこ

とだろ。はくの家では昆布巻き作るんだ。はく、昆布巻き大好き」と言います。

子どもにとって、「新年」という言葉は、そのま
ま、お正月を想起させるようです。B子のお正月は
「デパートのおせち料理を食べる」こと、S夫の場
合は「昆布巻き作り」を思い出しています。

「昆布巻きが、お正月の思い出になっているのはな
ぜだろうか」と、興味をもちました。そういえば、

S夫の母親が年末になると、必ず作り始めるのが昆
布巻きです。年末の忙しい時期のおせち料理作りは
主婦にとって大仕事です。そのため、子どもたちも
動員され昆布巻きを手伝います。S夫にとって、暮
れの昆布巻き作りは楽しいお手伝いなのです。

最近では、父親も参加してお正月の昆布巻き作り
を続けています。そのためか「ゴボウを豚肉で巻き、
それを昆布で巻いて煮る」といった、その家独特の

大きな昆布巻きが出現しました。

除夜の鐘を聴きながら家族で作った昆布巻きは、
父親の運転する「年賀」の車に乗せられて、父親や
母親の実家に運ばれます。

お正月というハレの日をどう迎えるかは、それぞ
れの家庭によって違います。B子の家ではお正月に
なると、デパートのおせち料理を買って食べるとい
うことです。

最近では暮れになると、どの家庭にもおせち料理の
予約ビラが舞い込みます。とかく少人数になってし
まった家庭では、カタログからその家庭に適したお
せちを予約しておけば、年末、店が届けてくれま
す。届けてもらえないにしても、大みそかになって
予約した店まで行けば、彩りよいお重が用意され、
それを年始のテーブルに載せると、元日の祝いの膳
になります。少々費用はかかりますが、それも合理

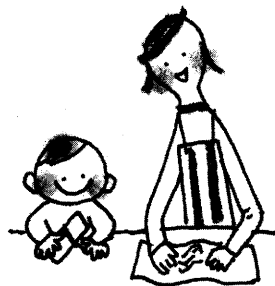
的かもしれません。

S夫の家でも、かまぼこや伊達巻は専門店から買っているそうですが、昆布巻きは、毎年家庭で作ります。

家庭の料理がどんな雰囲気の中で作られているかは、その料理の味まで支配します。したがって、料理が作られるプロセスで味わう充実感もまた料理の貴重な調味料になるといえます。S夫は三人兄弟の末っ子ですが、正月料理、特に昆布巻き作りでは、それなりの役割をもっているようです。

S夫の家の昆布巻きは、その歴史をたどれば、S夫の母親が娘時代に実家で家族と一緒に作っていたものにつながります。母親の実家では曾祖母の時代から、暮れになると、おせち料理を作るのに大わらわでした。

曾祖母の昆布巻きの中味は身欠きニシンでした。



その娘である祖母はハムを芯にして作っていたといえます。おせち料理に昆布巻きが登場するのは、新年を祝う祝い魚を調える意味があります。それと同時に、代々の母親は子どもたちに健康食品である昆布からカルシウムを摂らせて、丈夫な体の子どもを育てたいという願いもありました。

実用と形式を兼ねた昆布巻きは主婦が実家から持ち込んで、家族と育てた家庭文化といえるでしょう。忙しい思いをして、お正月のご馳走を用意してくて済むような時代になっても、昆布巻きだけは作

り続けているのです。

日本には昔からさまざまな家庭文化が存在しています。それらの多くは親から子どもへ伝えられているものです。一般に、家庭文化は母親が娘時代に親元で家事を手伝うことで学びます。お正月料理もしかりです。

母親が実家で身に付けた家庭文化は、結婚するこ
とで夫方の文化と混じり合って、子育てを通して子どもたちに伝えられます。

家庭文化には、しきたりや習わしなどいろいろあります。繰り返しも多いわけです。お正月行事も同じです。家族はそうした繰り返しの家庭行事の中で不思議に安定できるのです。しかし、それだけではありません。家庭文化は、父親や子どもたちとの生活の中で変容していきます。したがって、子どもは家庭文化の単なる受容者ではなく変革者でもあるのです。家庭文化は、形を変えながら生活の中で継承

されます。

戦前の日本人は大人も子どもも、「お正月が来たら一つ年を重ねるのだから、しっかりしなければ」と励まされてきました。しかし戦後は満年齢で数えられるようになり、この論は通用しなくなりました。考えてみると、お正月は過去と未来をつなぐ接点といえるかもしれません。お正月の迎え方、過ごし方によって、新しい年への期待は違ってきます。

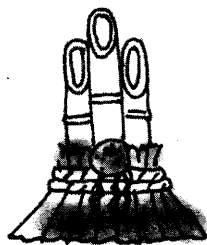
日本人が古来ハレの日として尊重してきた「お正月」が、過去と未来の接点であるとすると、子どもにとっても大切な日です。毎年訪れてくるお正月を家族の集いの場として、伝統を活かした家庭文化創成を楽しんでほしいと思います。家族はそれをバネにして、新たなエネルギーを湧出させます。子どもたちのエネルギーも倍加するにちがいありません。それが未来の活力として生きるのです。

(元十文字学園女子短期大学 幼児教育学科)

特集

子どもと新年 しあわせの記憶 わが家流お正月

すとうあさえ



年神様をお迎えする日

私は、一昨年の二〇〇七年に、『子どもと楽しむ行事とあそびのえほん』（すとうあさえ／文 さいとうしのぶ／絵 のら書店）を出版しました。四季折々の行事の由来と遊びを、絵本の形でまとめたものです。書くにあたり、行事について、さまざまな資料を調べ、家族を初め多くの人に取材しました。

四年という長い時間がかかりました。

この本を書き上げて、行事には、先祖たちの豊作、健康、子どもの幸せに対する「祈りや願い」が込められていると感じました。

行事の中でも、「お正月」は特に重要です。新しい年神様をお迎えして、一年間元気に生きる力をもらい、豊作を祈るという意味があるからです。

年神様は、穀物の神様で、「トシ」は「稲」のこ

と。その年の縁起のよい方角（恵方）から、いらっしやるそうです。

「門松」は、年神様が訪れるときの目印であり、「お雑煮」は、大みそかに年神様にお供えしたお餅や野菜をおろし、神と人が一緒に食べる料理のこと。「お年玉」も、年神様から魂をさずかるという意味の「年魂（としだま）」が由来だそうです。

子どもとお正月

私は子どものころ、お年玉と友達からの年賀状が楽しみで、大みそかは遅く寝たにもかかわらず、元旦はウキウキした気持ちで早起きしたものです。

元旦は独特な雰囲気がありました。いつもより家の中はきれいに掃除され、みんな新しい服を着て、少しかしこまって「あけましておめでとうございませう」と、あいさつをします。食卓にはすでにお正月にしか登場しないお重とお屠蘇（とそ）セット、そして家族の

干支（えと）が描かれているお箸が用意されています。お雑煮のお椀の蓋を開けると、ゆずの香りがぶーん。

高校教師だった父は、お屠蘇をいただく前に、姉と私と弟に必ずこう聞きました。

「今年の自分の目標を言いなさい」

「えー」

「わかんない」

「やだー」

などと文句を言いつつ、三人とも、結構まじめに答えていたように思います。

小学生のときは、「弟とけんかしないようにします」とか、中学生になると「部活のバレーボールでレギュラーをとります」とか、全員、目標を言い終わると、父は「がんばりなさい」と言っ、お年玉を渡してくれました。

子どものころ、毎年繰り返されていたわが家の元旦スタイルです。年神様をお迎えする日などという

ことはまったく知りませんでした、子ども心に、お正月は一年の始まりで、背筋をピンツとして迎える日、という印象がありました。

新年のおまじない

今ではお寺や有名な神社に初詣に行く人が多いのですが、本来は元旦に自分の住んでいる地域にある氏神様にお参りにいくことを「初詣」といいます。お正月に近所の神社に行くと、私たち子どもは、親をまねて、二拝二拍手一拝で手を合わせ、お願いごとだけは山ほどしていました。

そんないい加減さは未だにぬけず、私は五年ほど前から家族と「ワクワク恵方参り」をしています。その年の縁起のいい方向（恵方）にある神社に、初詣に行くのです。夫や息子たちと遊び感覚で始めたのですが、何となくいいことがあるような気がして「ワクワク」。新年のおまじないです。

もう一つ、「初夢」のおまじないも楽しいです。初夢は新年になって初めて見る夢のことです。昔、夢は神様のお告げだという考えがあり、内容によって一年の吉凶を占ったそうです。いい夢は、お馴染み「一富士、二鷹、三茄子」。富士山は日本一高い山。鷹は「高い」に重ねて、「高い志を貫く」という意味があり、茄子は「事をなす」に通じるとか。よい夢を見るおまじないとして、「宝船」の絵か、悪い夢を食べてくれる「バク」の絵を枕の下に入れて眠るといいそうです。

息子たちが小さかったころ、宝船の絵は難しいので、バクの絵を描いて枕の下に入れてあげました。バクの力のおかげでしょうか。悪い初夢を見たという話は聞いたことはありません。もともと「何の夢を見たか覚えていない」という年がほとんどだったような気がします。

バクのおまじないの効果はわかりませんが、それ

もわが家スタイルとして、息子たちの家庭に引き継がれていったらいいなと思っています。

何といつても、しあわせのおまじないですから。

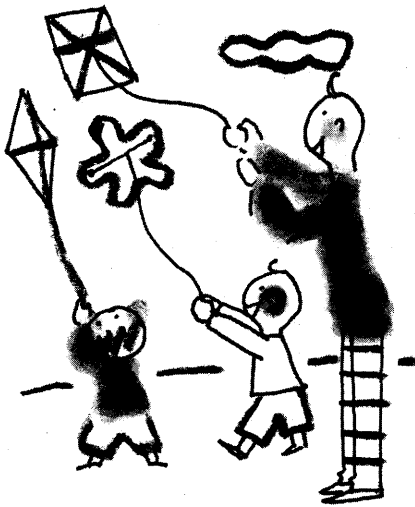
お正月の遊び

羽根つきやカルタ、すごろく、福笑いなどは、お正月ならではの遊びです。トランプはお正月だけでなく普段でも遊びますが、カルタは、お正月にしかやりません。考えると不思議です。

子どものころ、お正月になると、家族が二つに分かれ、なぜか家の中で羽根つき大会をしました。羽根つきのルーツは、昔、小さな子どもが蚊にさされないようにというおまじないで、トンボは蚊を食べるので、ムクロジの実をトンボの頭に見たてて羽根を付けたそうです。子どもの健康への祈りから生まれた遊びで、特にお正月に限らなくてもいいと思うのですが、やはり、羽根つきもお正月が似合います。

もう一つ、お正月の遊びといえばこま。奈良時代に唐から伝わって、初めは貴族の遊びでしたが、江戸時代に大衆の遊びになりました。

私はどうもこままわしが苦手です。息子たちが、とても上手にまわしているのを見ると、うらやましくなります。ひもの巻き具合や、こまを手放すときの力の入れ具合など、子どもたちはすぐに身に付け



てしまうからすごいです。息子たちは、こまのまわし方と、たこの揚げ方を夫から教わりました。夫はどちらもとても上手で、特にたこ揚げは名人級です。多摩川でたこ揚げをしたときは、たこが川を越えてすーっと向こう岸にまで伸びていきました。通る人たちが次々に足を止めて、「すごいですね」「ちよつと糸を持たせてください」などと声をかけてくるものですから、夫はもう満面の笑み。息子たちもまるで自分が揚げているかのように得意そう。たこ揚げのコツはきつと、息子からまたその子どもたちへと家族内伝承されていくことでしょう。

新年の始まりは、ゲームやパソコンから離れて、羽根つきやこままわし、たこ揚げなど、自分の体と感覚を使って遊ぶのもいいものです。

七草と鏡開き

一月七日に七種類の野草の入ったお粥を食べると

一年間病気をしないという風習があります。お正月も一週間を過ぎると、何となくおなかに優しい食事が欲しくなるので、七草粥は毎年必ず食べます。

「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ」。七草は、今ではスーパーなどで売られています。ナズナ、ハコベラ、ホトケノザなどは私の子どもたちには普通に周りに生えていました。私の友人は、七草粥の気分で、ベランダで育てているハーブの中から七種類を選んでリゾットを作るそうです。七ハーブ粥も邪気（ばけ）を祓（はら）うパワーがありそうですが、時代の流れを感じます。

新年の食べ物といえば、お餅。年神様にお供えした鏡餅をおろしてお汁粉にして食べる「鏡開き」という行事があります。

本来は一月十一日ですが、わが家では鏡餅の表面がひびわれ、底の部分がカビが生えてきそうだと判断したその日が鏡開き。一般的に、包丁を使うのは

「切る」に通じて縁起が悪いので、木槌で割ります
が、私はこだわらずに包丁で切ってしまいます。

お汁粉に入れて食べるのはもちろん最高においしいのですが、母は時どき、あられ餅にしてくださいました。鏡餅を一センチメートル角ぐらいに砕いて、お日様に干してから、油で揚げます。油を切って、塩をばらばら振ればできあがり。そのおいしいこと。姉と弟と競って食べたのを覚えています。

しあわせの記憶

新年は、自分の家の中も外も、町も店も、車や電車、バスまでもきれいに掃除され、近所の人に会えば「あけましておめでとうございます」と改まってあいさつを交わします。

小さな人たちも、いつもと違う空気を感じとっていると思います。家族そろって、お正月の特別な料理を食べ、お年玉をもらい、遊びを楽しみ、神社に

お参りしたり、親戚の家へ出かけたり。過ごし方は、十人十色。家庭によって違います。それが、代々継承されて家庭の色になっていくのです。七ハープ粥の家庭があってもいいし、恵方参りを遊び感覚で楽しむ家庭があってもいいのです。私がそうだったように、子どもたちはわが家流を、頭ではなく、体に染み込ませていくのだと思います。

元旦の食卓の景色、父の質問、部屋での羽根つき大会、あられ餅……、それらは、両親からもらった私の五感に刻まれているしあわせの記憶です。最近思うのですが、私が行事を継承していく原動力は、この「しあわせの記憶」にあるのかもしれない。

新しい一年の健康と平和を祈りつつ、この地球上に生きるすべての小さな人たち一人ひとりに、温かなしあわせの記憶が刻まれていますように……。
心から願っています。

(絵本作家)

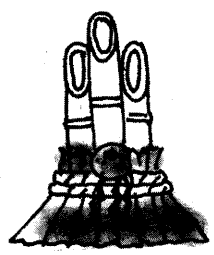
特集

子どもと新年 昔遊びを楽しむお正月

新年を迎える準備

私が以前勤務していた公立保育園では、クリスマスツリーを片づけると同時に、お正月を迎えるための大掃除が行われます。二歳児クラスは、タオルを小さく切ったぞうきんを使って保育士と一緒にロッカー、玩具を拭き、大掃除ごっことして楽しみながら保育室のお掃除に参加します。五歳児クラスでは、大掃除の意味も理解できて意気揚々と始めます。

私市和子



「あー 汚れている」と保育室の壁の上の方を指さし、棚の上に上ろうとする子もいて「そこは先生がやるから」と話すと、「自分たちの部屋だから自分でやる」と言います。年末の大掃除なので子どもたちの気持ちを受けとめ、担任が付いて壁の掃除もしました。子どもたちは「きれいな部屋になったね」「これでお正月を迎えられるね」と自分たちの保育室に満足した表情を見せていました。

十二月二十八日は、街に師走の様子を見に行くの

が年長児の恒例です。街を吹き抜ける風は冷たく、クリスマスの華やかさはなくなり、師走の忙しさが伝わってきます。商店の大掃除を見たり、歳末大売出しの看板を見ついたりして「なんて書いているの?」と聞くので、「お正月がくるから洋服安く売りますって」と答えると、うれしそうに「お母さんに教えてあげよう」と友達顔をのぞきこんで言っていました。

ここ数年、大きな門松が見られなくなっただけで、ながら花屋の店先まで来ると「あ! お正月があったよ」と子どもたちが見つけたのは松やセンリョウでした。

道路には、しめ飾りの露店が出てお店の人が手際よく、しめ縄で昆布・えび・橙を飾る姿に子どもたちは目を見張り、「あれは何?」「喜ぶで、昆布を飾るのよ」「へえー」保育士とのやりとりで、お店の人にも思わず笑みがこぼれていました。

新年を迎えて

新年を家族とゆつくり過ごして、一月四日から保育園は始まります。新年を迎えた保育室には、日本の伝統的な玩具(こま、けん玉、羽根つき、カルタ、すごろく)が子どもたちを待っています。

五歳児のA君は、夕方の迎え時間になると落ち着かず乱暴な行動、言動が見られていました。降園時間の遅いA君は、ほかの子のお迎えが気になるのでしょう。A君がどうしたらこの時間帯に遊び込めるのか、私たち保育士は悩んでいました。しかし、お正月明けは違いました。四歳のときからこま回しができるので、こまの登場に喜び、夕方友達とどちらが長く回っているかで勝負していました。

「先生! 勝負しよう」と言い、手をなめ、こまのひもを巻くA君。私も手加減せず回すと、A君のこまが先に止まりました。その瞬間、私のこまを足で

止め「へへ……」と笑います。何を言われるのかなという表情のA君に「もう一回勝負しようか」と声をかけ、今度はA君の勝ちでした。誇らしげにこまを見ているA君に「A君の勝ちだね。でもさっきは先生悲しかったよ」と話すと、「うん、もうしないよ」と自分でやった行動が、わかっているという穏やかな声でした。乱暴な行動が多かったA君が夢中でこまを回し、友達にひもの巻き方を教える姿を見て、保護者の方が声をかけてくださいました。

こま回し遊びは、五歳児みんなが夢中で、その姿を見て、四歳、三歳児がやってみたいとチャレンジする子どもたちがいて、縦の関係が生まれます。上手にできる五歳児にカッコイイ！と憧れ、五歳児はさらによいところを見せようと技を磨きます。

登園、降園時にこま、羽根つきで遊ぶ子どもたちの姿に昔を思い出されるのか一緒に遊び、アドバイスしてくれる保護者の方、祖父母の方もいました。

自分の子どもだけでなくほかの子どもの成長にも気づき、励ましてくださることが、子どもたちに自信をもたせ、育つ力を与えてくれるのだと思います。

異年齢児のカルタ遊び

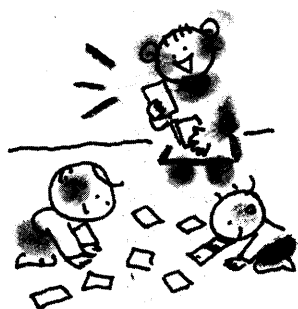
また、異年齢児が自然に交じりあつて遊ぶ姿が見られるものに、カルタ遊びがあります。

一歳・二歳児のカルタは、保育士特製の大きな絵札のみのカルタです。読み手は絵を見て創作文を読み上げます。二歳児は真剣そのもので、取れたときはとても喜びます。朝、夕の異年齢交流保育時間では、四歳、五歳児が読み手役になり、言葉を考えて読みあげます。

「リ」、りんごは赤くておいしいよ」
「あ」、アイスクリームたべたいな」

なかなか、絵札が取れないでいる二歳児には、四歳・五歳児が、「ほら、あそこだよ」と優しく教えてくれます。一歳児も知っている絵札をたたいて、その絵札を五歳児に渡され、うれしそうに抱きかかえます。抱きかかえ、その場からいなくなる子や、勝手に好きな乗り物の絵札を持って行ってしまいう子もいますが、「だめだよ」と言いながらも「まあ、いか」と一歳児には寛容な子どもたちです。

幼児の部屋では三歳・四歳児が取り、字の読める



五歳児が読み手になり、小さい子にルールも教えています。「Aちゃんが先だったよ」、何人もの手が出ると「ジャンケンしてね」、その場を仕切っていると四歳児が三歳児相手にうれしそうに読み手になります。でも知っている字だけ読むので、三歳児は保育士の顔を見上げ困った表情で助けを求めています。たどたどしいけれど一生懸命読んでいるのがわかり、拒否することができないのでしょうか。遊びの中で相手の気持ちをくみとることが社会性を育てるのではないかと思います。

異年齢で遊ぶことの多い保育園ですが、お正月の遊びは、ルールがわかりやすく、みんなで楽しめて縦のつながりを感じます。大人から子どもたちにも、また大きな子から小さな子どもへと伝わるこの日本の伝承遊びを大事にしていきたいと思います。

(お茶の水女子大学 いずみナーサリー)

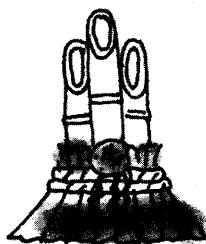
特集

子どもと新年

時の結び目といふこと

— 情報技術時代の
子どもの成長について —

鈴木禎宏



かつて、正月二日といえは一年で最も退屈な日でした。冬休みが始まると、子どもたちはクリスマス・イブやクリスマスを控え、何とも言えぬ落ちつきを覚えたものです。この感じは年末に向かつて高まってゆき、ある種の高揚感と共に大みそかの歌番組、元旦のお雑煮とお節料理、お年玉、年賀状、初詣を迎えました。

ところが、翌日の二日というのは三が日でありな

がら、何とも退屈な日でした。年賀状は来ませんし、テレビにも倦怠感を覚えるころです。外へ出てもお店はどこも閉まったままで、当分開く心配がありません。大人たちは年末年始の疲れが出て、家で休みがちです。皆それぞれの家庭の事情があるので、友達と遊ぶこともできません。そうすると子どもは、何とも退屈な一日を送るのでした。

翌三日になると、また雰囲気が変わります。やが

て元の日常生活が戻ってくる、という予感がし始めるのです。年賀状は配達されますが、その量は減ります。また郵便屋さんは年賀状を届けてくれる特別な人ではなく、仕事で郵便物を扱うだけの普通の人へと戻ってしまうようです。幼心にも、楽しい特別な時間が長く続くことを祈りたいような気持ちになったものです。

しかし近年は、正月の三が日もだいたいお様変わりしました。コンビニエンスストアは年中無休ですし、いつのころからか、年賀状は一月二日にも配達されるようになりました。宅配便も年末年始に関係なく届けられます。正月の元旦といえども、一年に三百六十五ある、日々の中の一日分でしなくなりつつあります。

民俗学には、「ハレ」と「ケ」という考え方があるそうです。ハレ（晴）が非日常的な、改まった特

別な状況を指すのに対し、ケ（褻）は日常的な普通の生活・状況を指します。ハレの日には特別な服を着て（晴着）、特別な食物を食べますが（たとえば赤飯など）、この意味で新年などの年中行事や七五三、結婚式などの通過儀礼は、ハレの日でした。

ハレとケの対比にはさまざまな意義があります。その一つに時間という途切れのない流れの中で、ある種の区切りを付けることがあげられるでしょう。たとえば、現在年齢は誕生日ごとに満年齢で数えますが、かつては数え年で数えることが一般的でした。家族で新年を迎える瞬間は、人生という時間における一つの節目であり、親が子どもの成長を確認したり、子どもが自分の成長や肉親の老いを意識したりする契機となりました。

また、正月のことを新春月と呼ぶことがあります。が、この言葉には厳しい冬の寒さの中で春の到来を期待する気持ちが込められているようです。余談で

すが、かつてゲルマン民族の人々は、太陽の光が一年で最も短くなる冬至の日に、ろうそくを樅もみの木の枝に立てて火をともし、光の復活を願ったそうです。

この習慣はやがてキリスト教と習合し、現在のクリスマスツリーへとつながります。あたたかい陽光が戻ってくることを希求する点で、新春という言葉やクリスマスツリーには、再生（あるいは復活）への願いが込められているようです。

このように、特別な日や状況を定めることにより、時間の流れに結節点（アクセント）が設けられ、一年や一生という時間の中にリズムが形成されていたわけです。

しかし、前述のとおり、現在ではハレとケの落差はなくなりつつあります。コンビニエンスストアやファストフード店では、一年を通じて同じような食べ物があるような値段で売られ、レジャー施設では、

年間を通して趣向を凝らしたお祭りが毎日催されています。一年を通してさまざまな服飾を楽しむ人にとっては、新年の晴着といえど、日常的なコスプレの一環でしかないでしょう。こうした事態は、ハレとケの不分明化ともいえるでしょうし、あるいは、ハレの日常化ともいえそうです。ハレの日でなければおしゃれができず、またおいしいものが食べられなかったというかつての状況に比べるならば、現在の日本は便利で豊かになったのでしよう。

こうした状況の背景には、昨今指摘されるようになった、いわゆる情報技術革命があります。これは人々の生活をいや応なく変質させています。もちろん、ハレとケの溶解は、大量生産・大量消費という世相の到来と共に起きたことであり、昨今に始まったことではありません。ただし、大量生産・大量消費を可能にした工業化の時代においては、モノとモノの交換に価値が置かれていたのに対し、現在の情

報化の時代においては、情報という、コトとコトの交換に価値が置かれている点で、時代状況が異なっています。もちろん、いつの時代も物と物の交換なくしては、人々の生活は成り立ちません。しかし、現代の取引においては、物の生産方法や物の交換というよりは、生産や交換という行為をいつ、どこで、どのようなやり方で、誰が行うかに人々の関心が向けられているようです。インターネットを紹介した通信販売において、人々は商品の現物に触れることのないままそれを購入し、電子決済によって支払いを行うことが一般的ですが、もはやそうした取引のあり方に誰も疑問を抱かなくなりました。

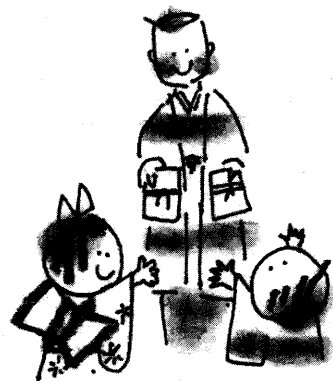
こうした状況は、子どもの成長や子育てとも無関係ではあり得ません。子どもの幼稚園・学校などを選ぶ際、インターネットは情報収集の道具となります。また、情報技術は子どもの安全対策にも用いられます。たとえば、ICカードを持った子どもが駅の改

札を通過したり学校の校舎に入ったりすると、そのことが電子メールで親に通知されるというサービスが既に実用化しています。また、子どもや高齢者の居場所を、携帯電話やGPS機能付発信機によって把握するというサービスも既にあります。さらに遊びにおいて、親と子は手を用いて自然と触れ合った玩具で遊んだりすることもできますが、屋内でネットゲームやテレビゲームに興じることもできます。人と物を情報として扱い、結び付けていく技術は、「ユビキタス」というかけ声のもとでさらに発展をとげ、今の子どもたちが大人になるころ、世の中は現在よりもさらに「便利」になることでしょう。

ただし、先に述べたとおり、このような状況においてはハレとケ、聖と俗といった対比が成立しづらくなります。これらの対比は、見方を変えると、人為的に時間や空間を歪めようとする努力といえるか

もしれません。すなわち、ある種の価値付けによって、時間や空間を不均一にし、特別な「場」をつくりだすという試みです。ところが、技術の発展によって人々の生活に絶えず情報が侵入し、人や物を情報（コト）として結び付けるようになった結果、人には常に一樣な時間と空間の中に居ることが求められています。たとえ神社や教会で祈りを捧げている最中であっても、懐中の携帯電話はさまざまな電気信号を受信し続け、そして返信を要求し続けることでしょう。

このような状況では、ハレやケ、聖と俗といった時の流れを刻むアクセントは不明瞭になり、年中行事や通過儀礼がつくりだす生の営みのリズムは不規則になりがちです。そうすると、ただ単調で均質の日常性―聖俗や、ハレとケといった振幅・ゆらぎを失った―だけが続くことになります。情報技術に裏打ちされた「終わりのなき日常」は、さらに際限なく



大人や子どもたちをその網の目の中に絡め取っていくことでしょう。

されど、技術の発展は人々の成長に寄与するとは限りませんし、また幸福を常に約束するとも限りません。むしろ、成長や幸福感というものは、そうした利便性とは別の場に根ざしているようです。新年―クリスマスにせよ、正月にせよ―という年中行事

を例にとると、コンビニエンスストアや百貨店で出来合いの季節料理や菓子を買うことが、もし一般的だとするならば、家庭でわざわざそれを親子で調理することは、時間と労力の無駄かもしれません。インターネットを利用して宅配便を手配したり、預貯金口座に送金したりすることを便利と呼ぶとするならば、わざわざ顔を合わせて子どもにプレゼントやお年玉を手渡すことは不便です。新年のあいさつを「あけおめ、ことよろ」という電子メールの符丁で済ますことが標準になるならば、年賀状を送ったり、相手宅まであいさつに出向いたりするのは野暮というものでしょう。されど、こうした一見無駄で不便で野暮なことを抜きにしてしまうと、大人も子どもも学びの機会や、来し方行く末を振り返ったり思索したりする機会を失うのです。ひいては、己の生の営みを結び直し、そこから新たな気持ちで人生の歩を踏み出す契機を失うことになります。

今の子どもたちは、将来どのような新年を迎えるのでしょうか。親や家族が家にいないクリスマスや正月を子ども時代にも過ごす人もいるでしょうし、大人になったとき、年末年始に関係なく労働に従事する人も現れるでしょう。「便利」な世の中が維持されるには、それに見合う労力が要請されます。そうであるがゆえに、みんなのできるだけ（各自可能な範囲において）無駄で不便で野暮なことに動しむこともまた重要なのではないのでしょうか。

筆者には、もはや子どもたちの気持ちはわかりませんが、かつて子どもだった者の一人としては、一年のうちせめて一日ぐらい、子どもが無為をかこつ日があってもよいように思えるのです。

（お茶の水女子大学 大学院准教授。専門は比較文化論／生活造形論。著書として『バーナード・リーチの生涯と芸術』ミネルヴァ書房、二〇〇六年など）

園長のまなざし

第一回

冬空をのぼるあなたへ

向山陽子

新しいあなたを迎える、新しい朝が大好きです。

おうちでは末っ子のあなたが、お母様の熱い視線を感じながら「エイッヤッ」と一人の「良太」に変身して、友達の中へ入っていくさまがよく見える玄関の朝だから。

太陽や雨や木、水、土、火、風を、体中に感じて遊ぶのが大好きなあなたは、はだしになり裸になって友達と感じ合い、言葉ではなくコミュニケーションでできる仲間を育み合ってきたね。すごいよ。

パンツ一丁で大地に座り込んで泥んこをこねくり回し、満面の笑顔で笑い合っていたのは、ついこの前のこと。

きつぱりと冬が来た時、葉を脱ぎ捨て枝を天に伸ばした冬木立に守られて、一月の真っ青な空に向かってのぼるあなたがいた！

あなたへと差し出す友達のまなざしと心もちが、羨ましい。



五歳になったばかりのあなたたちは、もう一回ずつこの幼稚園で春と夏と秋と冬とを過ごせるね。

走ることも、作ることも、描くことも、話すことも、思いやることも、けんかすることも、話し合うことも、力を合わせることも、もつと上手になって、培ってきた力が見えてくるのが楽しみです。

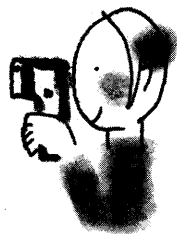
大きく枝を張る木は、見える枝と同じだけの根っこを見えない土の下に、深く広く張ると云います。

今のうちに、もつともつと、根を張っておこうよ。ゆつくりゆつくり、深く、広く。

それは、あなたたちの人生の根っこ。そして、根っこを張ったこの幼稚園はあなたたちのもう一つの故郷。

私にできることは、新しいあなたたちを、まぶしい思いで見つめることだけ。幸せです。

(東京都 大和郷幼稚園)



保育の中の物語 (1)

綱渡り、大成功

岸井慶子

ある寒い日、四歳のA男がジャンゲルジムの上で勢いよく片手を上に突き出し叫ぶ。「やったー!」。雄叫びを思わせるその叫びは「宣言」である。苦勞して苦勞して最後にたどりついたゴールでの勝利宣言だ。

多分、その日は自分で決意して渡り始めたのだろう。慎重に、慎重に、少しずつ、小さな滑り台の上からジャンゲルジムに向かって綱を渡り始めた。腕を大きく開いて上部の綱を握りしめ、下部の不安定な綱から落ちないようにバランスを取る。わずか数メートルの距離だが、上下の綱は別々に揺れるので簡単には進めない。力を込めたその両腕、強く綱を握り締めた拳、落ちまいとして必死に突っ張る両足。しばらく無言の格闘が続いた。



中ほど過ぎたとき、突然「頑張るぞ、頑張るぞ、揺れても落ちないように頑張るぞ」と繰り返す声が聞こえるようになった。なぜ、急に声を出すようになったのか不可解だった。しかし、後でビデオを見直すと、一人の女の子が近くにやってきてA男の様子をじっと見ている。そうか、A男は彼女のことを気づき意識したのだろう。女の子が来るまでは、きつと心の中で自分を励ましていたに違いない。頑張る気持ちは女の子が来る前からあったのだろうが、その気持ちは相手がいることによって声になり表現になるのだ。誰かがいることはいのことだなあ。

困難は突然起きた。スタート地点にいる一人の男児が綱を揺らし始めたのだ。A男は揺れる綱から落ちまいとしながら「揺らさないで！揺らさないで！」と、大きな声でその男児に向かって何度も叫ぶ。しかし、相手は笑みさえ浮かべて揺らすことをやめようとしなない。なおもA男は「やめて。揺らさないで」と必死の形相で叫ぶ。その必死さ、必死さを隠そうとしなない正直さに惹きつけられる。綱の揺れは止まった。

揺らした側の男児にしてみれば、「揺れても頑張るぞ」と言っていたのだから「そうかい。それなら、揺らしてあげようか。おもしろいだろう？ ほらほら……」程度の軽い気持ちだったのではないだろうか。A男を振り落とすほど



の荒い揺らし方には見えなかった。

そのほかにも小さな困難はあった。たとえば、綱渡りの途中には両足で立ち一息つけるビールケースが置いてあったのだが、隣で遊んでいた女兒たちがさつさと運んでいってしまった。

喜びの瞬間、彼の視線の先には、少し離れた砂場でほかの幼児とかかわっている担任がいる。やはり、うれしい瞬間を伝えたいのは「担任」なのだ。この場面をビデオで詳細に観ていくと、A男が到着点であるジャングルジムに足を掛けようとする瞬間、つまり、成功を確信したであろうそのときにはもうA男の視線は担任のいる方向に向かっていることがわかる。成功してから担任を探しているのではなく、成功を確信したときには誰に伝えようか心は決まっているようだ。担任はもちろん視線を笑顔で受け止め、A男の喜びを共感した。

保育の中に、生まれては消えるたくさんのお話がある。それらは互いに交差し、影響を与えながら大きな物語をつくっていく。たとえばこの日、綱のこちらをアメリカ、到着点をオーストラリアと名付けて世界旅行のイメージを綱渡りに残していった女兒たち。偶然通りがかり立ち止まって見ていた女兒は、A男の気持ちを声に表現させた。綱を揺らした男児の存在も、最後の「大成功」には欠かせない。すぐ隣では、手作りブランコに腰かけようと試行錯誤する男児、それ



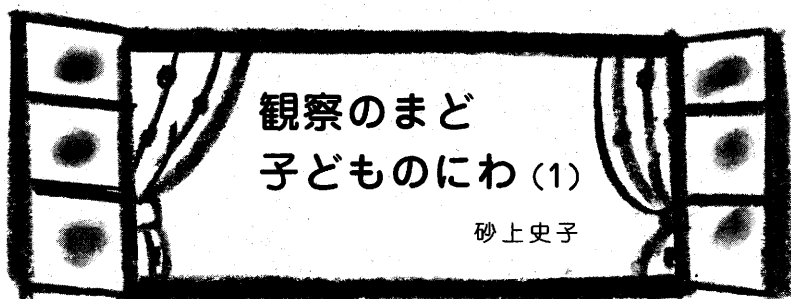
を手伝う女兒がいる。砂場では山作りに雇われたアルバイト数人に給料を払う社長さんがいる。A男を見ていたB男は、やはりその日初めて綱を渡った。そして、しきりに自分の手のひらを眺めては腰のあたりに何度もこすりつけていた。きつとあんなに力を込めて物を握った経験がなかったのではないだろうか。

この様子は、綱渡りの遊びが一段落した（と思える）時間に起きている。多くの幼児がたくさん参加し、そこはそこで充実した子どもたちの世界やドラマがある。しかし、誰もいなくなるまで、じっと機会を待っている幼児もいる。参加人数や表面的な活気に惑わされてはならない。おずおずと参加してくる子どもたちの内面に、熱い思いを感じる場合が多いのだ。

自分でやり始めて、苦勞して、やり遂げた。達成感とか満足感と一口でいうにはもったいないほどの心の経験だ。このような瞬間の積み重ねが、心を育てていくのだと感じさせられた。

（鎌倉女子大学短期大学部）

*ビデオによる保育観察とビデオカンファレンスを続けてきました。その中で子どもたちの「すこさ」に魅了され、私自身が育てられています。今まで撮らせてくださった先生方や子どもたちへの感謝をこめて、今月から保育観察を通して見つけた子どもたちそれぞれの忘れられない物語を書かせていただきます。



観察のまど 子どものにわ(1)

砂上史子

最初の観察記録から

—私の視点のち方、記録の書き方—

十二年前のノート

私が大学院生のときから幼稚園や保育所で観察を始めて十二年が過ぎました。最初の観察記録の日は「一九九七年五月二十二日」となっています。当時、私は大学院修士課程の一年生でした。今回、この連載の執筆依頼をいただき、研究室の隅の段ボールの箱から数年ぶりに観察記録のファイルを取り出してみました。おぼろげながら覚えてはいるものの、十二年前の記録であり、最初の観察記録で

あることから、懐かしさと多少の不安を感じつつ、ファイルを開きました。その日の観察記録には、次のように書かれていました。

今回は観察の初回だったこともあって、特定の観察テーマを持たずに、子ども達の遊びの様子全体を観察しました。その中で特に面白いと思ったのはKくんとTくんと本屋さんごっこが展開していく過程での物との関わり（物が子どもにとって持つ意味）です。（中略）

Kくんがハムスターのケージを囲んでいるのを見て、Kくん自身の居場所Ⅱ基地づくりをし

この記述に対応する観察記録は、前頁のようなものです（当時の観察記録を、プライバシーに配慮して書き直したものです）。

私の記録の書き方

私の観察記録は紙を縦長に用いて左端に時間を記入し、横にどこで観察したものであるかを示す場所の名前を書き入れています。観察は、大学院の研究室の人たちとまとまって二週間に一度のペースで行っていましたが、特に記録の書き方は決まっていなかったため、なるべく自分自身が現場で見て聞いて、感じたことを詳しく

書くことを念頭に置いてみたところ、自分にとって自然かつ書きやすい形式がこの書き方でした。

当初は、この形式が取り立ててユニークなものだとは思っていませんでしたが、観察の経験を重ねる中で、園の先生やほかの研究者の人たちから独特な様式だと指摘されることたびたびありました。保育における記録は「記録の形式によって『見方』が規定されることもある」（河邊、二〇〇五年）とすれば、私の記録の形式もまたそこで書かれる内容のありようと密接につながりがあるといえます。そこで自分なりにこの記録の様式を対象化してみると、三つのこと

が指摘できるように思います。

一つ目は、特定の子どもや活動、場に焦点を当てつつも、同じ空間（保育室であれば保育室全体。観察者が見渡せる範囲）にいるほかの子どもたちの動きや声を書き込めるようにしている点です。

先に示した図では、Kくん・Tくんの本屋さんごっこに注目しつつも、同じ保育室で遊んでいる子ども（ままごとコーナーのRちゃん、Mちゃん）の動きも同じ時間帯の活動として書き込まれています。

このように書く背景には、保育が同じ時間と同じ場の中で子どもたちがそれぞれにさまざまに活動を展開するものであるということこ

と。そしてそれらは、直接的、間接的に影響し合っていることを重視しているためです。なぜならば、先生と子ども、少人数の子ども同士でやりとりをする場合でも、子どもは直接的にかかわっていない先生や子どもの存在を意識的にも無意識的にも感じながら生活をしているからです。他者の存在をあるときははつきりと、あるときは微かに感じ、感じたものに反応しながら生活することは、人とのかわりや物とのかわりなどの幼児期の学びの重要な前提になるといえます。

ちょうど記録の中でKくんたちを不満気に見ていたRちゃんたち

が、ままごとコーナーの電話をKくんたちに渡しているように、子どもが、離れた場所にいる保育者や別の子どもとの動きや声に反応し、それらを自分の遊びに取り入れたり、それらにかかわっていたりする姿は珍しいものではありません。むしろ、そこに子どもが集団で生活する保育における遊びの意義があるともいえます。それは「集団のダイナミズム」ともいえますが、保育の中で「響き合い」という言葉のほうがしっくりくるような気がします。この「響き合い」をとらえるうえで、同じ空間で展開する複数の子どもたちの活動が同時に書き込める形式が

ふさわしいのだと思います。

二つ目は、時間の流れに沿った動きの流れを意識している点です。子どもが遊ぶとき、一つの空間で同時にさまざまな活動が行われると同時に、時間とともにそれらの活動は変化していきます。ある遊びをしていた子どもが別の遊びに移ったり、同じメンバーで遊んでいても遊びの内容が変わったりします。Kくんたちの遊びもハムスターのケージを囲むことから、囲んだ場所を家らしくすることへと少しずつ変化しています。その意味で、時間軸上の一点における姿ではなく、時間とともに変化する過程をとらえること、すなわち点

ではなく線としてとらえることが保育にとって重要だと考えます。

なぜならば、子どもの遊びとは揺らぎつつ進行し（無藤、一九九七年）、日々の保育の積み重ねが「育ち」という大きな時間の流れを生み出すからです。したがって、時間の経過とともにある遊びの内容や人間関係の変化を追うことで、子どもの興味や関心の対象、子どもの遊びを支える環境や保育者の援助がどのようなものであるかを具体的にとらえることができると考えます。

三つ目は、より具体的に詳しく子どもの姿をとらえるということから、記述の中に図も盛り込むよ

うにしている点です。これは観察者や保育者（担任の先生）にとって、具体的に詳しく子どもを理解する手がかりとなる重要な点です。実際に、子どもの作ったものを記録に描いてみて感じることは、子どもはあらかじめ明確なイメージをもつて描いたり、組み立てたりするだけではなく、物とかわる中でイメージを生成し、できあがった形を何かに見立てることも多くあるということです。そのため、子どもが遊びの中で生み出す形はむしろ複雑です。Kくんたちがハムスターのケージを囲った場合は、実際には私の記録の図よりももっと込み入っていたように



▲積み木で遊ぶ男児たち
（写真はイメージです）

思います。

そのような、素朴ではあっても複雑で、子どもの豊かなイメージをもとに名付けられている、あるいはこれから名付けられることを待っている子どもの表現をできるだけそのままに写し取る作業を通して、少しずつ子どもの行為の意

味が浮かび上がってくるように感じます。私自身は絵があまり得意ではないため、子どもが描く絵や積み木などで作る立体物を正確に描写できていないこともしばしばあります。しかし、つたない画力

ではあっても、子どもにとってさやかではあっても大切な意味を帯びた表現に間近で触れ、それをなぞることは、観察の大きな醍醐味でもあり、観察者の大きな学びでもあります。

「観察のまど」から

「子どもの「わ」へ

これらの特徴をもつ私の観察記録は、保育記録のさまざまな様式

の一つに過ぎませんが、この連載では、私の観察記録の中の具体的な保育の事例を取り上げながら、子どもの育ちの姿や保育者の援助の在り方などについて述べていきたいと思っています。

それは、観察という「まど」から保育の「にわ」(幼稚園の創始者フレーベルの「キンダーガルテン」子どもの庭)にも重なるイメージを眺め、そこで子どもや保育者の姿を写生する作業であり、広い「にわ」の景色を「まど」によつて切り取る作業となるように思います。この連載を通して、過去の観察の事例を見つめ直せることは、観察者として幸せなことだ

と感じます。なぜならば、過去の事例を考察することによって、観察者の「まど」の向こうには窓枠を超えた、時に窓枠の形や大きさも変えるような、保育、そしてその中で育つ子どもの姿の奥行きや広がりがあることを、改めて認識することができるとはならないかと考えるからです。

(千葉大学 教育学部 保育学
保育内容と発達との連関を研究)

引用文献

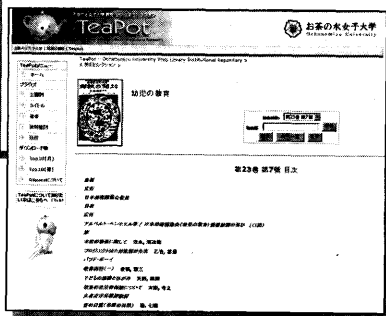
河邊貴子『遊びを中心とした保育』 萌文書林、二〇〇五年
無藤隆『協同するからだことば』 金子書房、一九九七年

*本文に使用した写真は、本文の事例を撮影したものではありません。

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて（１）

『幼児の教育』ネット公開と 幼児教育史研究の可能性

渡川 嘉津美



お茶の水女子大学附属図書館のWEB サイト
内「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にて、バックナンバーをインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼はじめに

『幼児の教育』誌がネット公開された。二〇〇八年八月現在、『復刻幼児の教育』の全文が公開されており、一九〇一（明治三十四）年の創刊（当時は『婦人と子ども』）から一九五三（昭和二十八）年までの掲載記事がパソコン上で読めるようになった。なお一九五四年以降についても順次公開される予定であり、幼児教育史研究者にとって、それは望外の喜びである。

『幼児の教育』と並ぶ幼児教育の専門誌として『京阪神聯合保育会雑誌』（一九二八年『関西聯合保育会雑誌』と名称変更）があるが、一八九八（明治三十一）年から一九二七（昭和二）年までしか復刻されておらず、戦後まで続く同誌の記事を通覧することは難しい。

そうした中で、『幼児の教育』は百年以上の歴史を持ち、しかも創刊から今日に至るまでのすべての記事を通読することのできる唯一の幼児教育雑誌であり、こ

れまでの研究でも重要な資料として用いられてきた。

筆者自身、大正・昭和初期の保育界の動向や倉橋惣三の保育論を検討するための資料として『幼児の教育』を用いており、『幼児の教育』なしに、近代日本の幼児教育史研究は成り立たないといっても過言ではない。

今回のネット公開では、『幼児の教育』が手軽に読めるようになっただけでなく、検索機能の活用により、必要な情報を瞬時に漏れなく利用することが可能となった。本誌第一〇七巻第九号（二〇〇八年）の「特集『幼児の教育』のネット公開をめぐる」では、そうしたネット公開のプラス面が示されるとともに、資料の簡便な入手による研究上のマイナスの影響が懸念されている。

本稿では、そうしたマイナス面があることを充分に認識しつつ、『幼児の教育』のネット公開が幼児教育史研究にどのような可能性を開くかという視点から、その研究上の意義について考えてみたい。

▼人物・思想研究の進展に向けて

『幼児の教育』には、日本の保育界をリードした（東京）女子高等師範学校附属幼稚園関係者の論説が数多く掲載されている。人物名で検索すると、中村五六（二三件）、東基吉（三一件）、和田實（八八件）、倉橋惣三（六一六件）となる。倉橋の場合、『倉橋』『くらはし』『SK生』『紹介子』などでも記事を掲載しているので、これらを合わせると記事の総数は七六四件となる。筆者はこれまで中村五六、倉橋惣三について論文をまとめているが、今回改めて『幼児の教育』の記事を検索していて、見落としていた論考がいくつかあることに気づいた。検索によって人物に関する情報が漏れなく入手できることは、人物・思想研究にとって非常に重要であり、それは今後の研究の進展に大きな力となるだろう。

従来、倉橋については比較的研究蓄積があるが、倉

橋の著作をその初期のものから時代状況とかかわらせながら歴史的に跡付ける作業は遅れている。加えて、

『倉橋惣三選集』（全五巻・フレーベル館）に収録された論考を中心に研究を進める傾向が強く、選集に未収録の戦時下の論考については、ほとんど検討されていない。しかし、倉橋は戦時下においても「国民幼稚園」論を盛んに展開し、時局の影響を受けつつも、幼稚園教育の義務制と幼保一元化、保姆の資格と待遇の向上といった幼児教育制度改革の必要性を主張していた。それは戦後の制度改革要求にもつながるものであり、「国民幼稚園」論の検討を行わずに、戦後の倉橋の主張や彼が果たした役割を理解することは難しい。

『幼児の教育』を通読することによって、戦前から戦後に至る倉橋の保育論の歴史的検討が進むならば、倉橋の評価も自ずと定まってくるのではなかろうか。

また、中村、東、和田といった人物の保育論も併せて検討することによって、近代日本の保育思想がどの

ように形成されたのか、その全体像を描出することも可能となろう。今後の研究の進展に期待したい。

▼問題史のアプローチへの期待

— 幼稚園と小学校の連絡問題を事例として —

検索機能が一番威力を発揮するのは、問題史研究においてである。今日の幼児教育をめぐるのは、幼保の一元化、五歳児保育の義務化・無償化といった制度的問題から、幼稚園教育の内容・方法、幼小の連携、子育て支援、保育者の養成と現職研修のあり方など、さまざまな問題・課題が提示されている。しかし、歴史を振り返れば、それらは戦前・戦後を通じて繰り返し提起され、議論されてきた問題であり、今日なお課題として残されているものである。したがって、その歴史的検討は幼児教育史の課題であると同時に、今日の幼児教育を考える上でも必要なことである。

ここではその一つの試みとして、「幼稚園と小学校

の連絡」を事例に、『幼児の教育』の記事を追ってみたい。「幼稚園」と「小学校」「国民学校」をキーワードに検索を行ったところ、次のような記事が見いだされた。

①一九〇七～一九一一（明治四十～四十四）年

「小学校より見たる幼稚園」（加藤末吉）

「幼稚園の手法と小学校の手工」（藤五代策）

「小学校と幼稚園との關係」（大元茂一郎）

「小学校より見たる幼稚園」（藤井利譽）

「幼稚園より小学校へ入學したる兒童の實際成績如何」（藤田東洋）

「幼稚園の保育を終りたるものと家庭より直ちに入學したる者と小学校に於ける成績の比較」（笹野豊美）

「幼稚園と小学校との課業上の聯絡」（佐々木吉三郎）

②一九一六～一九二三（大正五～十二）年

「幼稚園から小学校への聯絡一六」

（小山ひで、岡政、小向喜美、橋本よしち、三宅トモ、望月くに）

「小学校から幼稚園への希望一三」

（前田捨松、河野清丸、稻垣知剛）

「小学校に現はれた幼稚園の成績」（市島貞三）

「幼稚園と小学校との聯絡問題」（藤井利譽）

「幼稚園と小学校との聯絡問題（一・二）」

（アリス・テンブル女史、艶子訳）

「幼稚園から小学校へ―幼稚園と小学校幼年級の眞の聯絡―」（倉橋惣三）

「小学校から幼稚園への希望」（堀七藏）

「海外記事 幼稚園・小学校の初等年級のプロゼエクト」

③一九三三～一九四三（昭和八～十六）年

「小学校より幼稚園に望む」(櫻井美、小山文太郎)

「小学校と幼稚園との連絡問題」(久保田龜蔵)

「幼稚園と尋常小学校との連絡に關する資料調査」
(東京市保育會)

「幼稚園と小学校の聯絡」(倉橋惣三)

「国民學校の實施を前にして幼稚園に望む」

(堀七藏)

「國民幼稚園の名に於て」(三)

「國民學校との連繼性」(倉橋惣三)

「國民幼稚園の名に於て」(四・五)

「國民學校への正しき連絡」(倉橋惣三)

④一九五二～五三(昭和二十七～二十八)年

「特集 幼稚園と小学校との連絡」(編集部)

「幼稚園と小学校」(中川武夫)

便宜上、四つに時期を分けてみたが、第一期は、幼

稚園教育の效果に対する疑問から幼稚園批判が巻き起こっていた時期であり、幼稚園修了者の小学校での成績や幼稚園の手艺と小学校の手工の連絡の必要性が論じられ、また、欧米の媒介學校をヒントに、幼稚園から小学校への円滑な移行を図るべきといった議論が展開されている。

そして、第二期においては、幼稚園の普及を背景として、幼稚園から小学校への連絡が解決すべき問題として取り上げられ、幼稚園保姆・小学校教員双方から具体的な方策が論じられている。アメリカにおける幼小連携の試みや幼稚園と小学校の学習をつなぐプロジェクトなども詳しく紹介されており、それは時代を超えて今日の幼小連携を考える上でも重要な示唆を与えてくれる。

第三期では、戦時体制へ向かう流れの中で、小学校(国民学校)と連携して皇国民鍊成を担う幼稚園教育のあり方が、国民教育の一貫性といった視点から論じ

られ、第四期では、戦後改革によって学校系統中に位置付けられた幼稚園と小学校との連絡問題が「緊急事項」として議論されている。

今回は試みに検索をし、記事を概観したにすぎないが、ていねいに検索すれば、もっと多くの関係記事を見いだすことが可能だろうし、内容を吟味して論点整理をきちんと行えば、今日につながる幼児教育問題の本質をつかむこともできるだろう。もちろん、『幼児の教育』の記事から見える世界には限界があり、その検討のみで結論を導くことには無理があるが、検索機能の活用により、時代を超えた問題の把握や全体の俯瞰が容易に行い得るようになったことの意味は大きく、それは問題史研究の今後の進展に寄与するものだろう。

▼おわりに

これまで『幼児の教育』のネット公開によって、幼

児教育史研究にどのような可能性が開けるかという視点から考えを巡らせてきたが、最近、初等教育史の側から幼児教育にアプローチする研究も増えており、先にみた「幼稚園と小学校との連絡」については、初等教育史研究者も大きな関心を寄せている。そうした中で、『幼児の教育』のネット公開は、今後、初等教育史研究にとつても意味のあるものとなるだろう。今後は『幼児の教育』を介した幼児教育史と初等教育史の研究交流を期待したい。

最後に、技術的なことで恐縮だが、検索を新字で行えるようにしていただければ、と思う。現在は「幼児」「教育」「小学校」「フレールベルグ」などと旧字で入力しなければ検索できないが、これを知らずに新字で入力すると、折角の検索機能を活かすことができない。また、戦後幼児教育史研究にとつて、五四年以降の『幼児の教育』の公開は重要である。鶴首して待ちたい。（上智大学 教授 日本教育史・幼児教育学）

アキオとネーネと石

古賀松香

・・ アキオとネーネ

“アキオとネーネは、いつも一緒だったのだ”

そのことに私が気づいたのは、アキオの姉（ネーネ）であるカオリが、小学校に通い始めたときでした。当時、アキオは一歳十か月でした。

アキオが十か月になり、私が仕事を再開してからというもの、二人は同じ保育園で生活してきました。ネーネとアキオはもちろん違うクラスですが、ネーネが園庭からアキオのクラスをのぞき込んで声かけたり、園庭で出会っては手をつないで遊んだり、ネーネはいつも近くにいる存在だったのでしょ。私は子連れ単親赴任をしてい



ますからどちらかを父親に託して出かけたことはほとんどなく、いつも二人は一緒だったのです。

突然の別れ

ネーネが小学校へ初登校する朝。通い慣れるまでは、と早起きして、アキオも一緒にベビーカーで小学校まで見送りに行きました。といっても、見送りに行くつもりなのは私だけで、アキオにとっては、なんだか不思議なお散歩だったのではないかと思います。見慣れない服を着て、大きなかばんを背負ったネーネの後姿を追って、アキオはものも言わず、ベビーカーに乗っていました。いよいよ小学校に着き、ネーネが「じゃあね、バイバイ」と振り向いて私たち二人に手を振りました。アキオはジッと見つめていました。私は「ネーネ、学校行くんだよ、バイバイって」と言っ

見つめたまま動きませんでした。

ネーネの姿が見えなくなつて、家に帰る途中、「ネーネ」と、アキオがつぶやくように言いました。「ネーネ、学校行っちゃったね」と私は言いましたが、アキオはまた静かにベビーカーに座っていました。

往復一時間ほどの道のりを帰りついたとき、アキオは「ネーネ！」と大きな声で呼び、返事のない玄関前で泣きました。家に入るのを嫌がり、「プー」と言っ

て車に乗り、保育園へ向かいました。ネーネのいない家に帰つてきて「ネーネ！」と泣いたアキオの姿を見て、ネーネの存在はアキオにとって常に隣にあり、生活を共にする存在だったことに、私は改めて気づきました。

生活とは、かわる場所や人がある程度決まっていることで安定してきます。細かなところは日々新しい子どもの生活ですが、同時に大まかな

.....

ところでは日々変わらず連続している部分があります。その変わらない部分が、子どもに安定をもたらし、生活の足場になるのだと思います。

アキオは、これまでいつも一緒にいたネーネが自分とは別の生活を送るようになり、自分から離れていってしまうことを体験したのです。それは、アキオの生活の安定を揺るがす、大きな変化でした。大人はつい、小学校に入学する子どものことに氣をとられがちです。しかし実は、生活を共にする小さな子どもにとって、きょうだいが小学校に入学することは、突然降って沸いたような大事件なのです。

・・家に帰ると

石を用水路へ落とすこと

その次の日の朝から、アキオはネーネを見送る道すがら、「イシ」と言っ、石を私に拾わせる

ようになりました。道端に落ちているごつごつとした小石を、時には一つ、時にはたくさん、私に拾わせては、小さな手に握り締めて、ネーネを見送りました。そして、見送った後、「ネーネ、ガッコウ」「ネーネ、学校行くのね」、「イッチャッタ」「行っちゃったね」と私と話しながら帰ります。見送りにきた道を引き返すと、同じ制服を着た子どもたちが次々と通り過ぎていきます。アキオはその制服姿を見て、「ガッコウ」と言うようになりました。

それから、家に帰り着く直前に渡る用水路の所で、アキオは「イシ」ともう一度言います。そこでベビーカーを止めると、手に握り込んだ石を一つずつ、用水路に

ポトン……ポトン……

と落とし、手の届かない水の底に沈んだ石を静かに見て、「イッチャッタ」と言うのでした。

多くの子どもは石を拾い、側溝に落としてみま
す。しかし、アキオの石にはアキオにとつての意
味があることが、はつきりと感じられます。毎日
ネーネを見送るときに握り込み、ネーネが見えな
くなってからポトンポトンと落とす。手の中に
しつかりと存在するということと、その存在が手
の届かない所に行ってしまうということ。それは
まるで、いつも一緒にいるネーネが、ガッコウと
いう手の届かない所に行ってしまう、アキオから
見た生活そのものを表しているように思えます。

ある朝、ネーネの登校前、アキオはぬいぐるみ
をめぐつて、ネーネと珍しく激しいケンカをしま
した。ぎゅつと握り込んでいる石を、その日だけ
は指でつまんで持ち、カチカチとかち合わせてい
ました。また、ネーネが道の途中、一緒に通う友
達に出会った日は、帰りのベビーカーで、石をさ
らに拾わせて、友達の数と同じくらい握って帰り

ました。

朝の見送りのときだけでなく、そのほかの所で
も、石を拾っては用水路や側溝に落とすことを繰
り返しました。ある一つの行動を繰り返すこと
で、生活の連続した部分をつくりだし、安定を生
み出していると見ることもできます。ただしそれ
は、不変のものとしてかたくななものではなく、
日々の細かな変化を受け入れるやわらかさをもち
合わせていることが、アキオの石とのかかわりに
見えるのでした。

…石を握り込むこと

また、アキオはほかの何かでなく、石を選びま
した。石は身近にいつもあるような存在で、容易
には変化しません。水に溶けるわけでも、幼い子
どもの力で簡単に壊れることもない、しつかりと
して確かな存在です。石自体は、とても安定した

性質であると感じられます。そんなどこにでもある普通の石を、アキオは毎日毎日手にしつかりと握り込みました。自ら意識的に手放すとき以外は、ずっと握り込んでいました。転ぶときも石を握り込んだまま転ぶので、よく指の外側を擦りむき、ひどいときは、顔を地面で打って鼻血を出すこともありました。それほど、その時期のアキオにとっては、石が大事なものでした。生活の安定した部分が大きく揺るがされたとき、アキオは石という安定した存在を手の中に握り込み、そこに石が確かに存在するということによって、支えられていたのではないかと思えるのです。

・見通しがつく

そんな生活を一月ほど続けたころのことです。朝、ネーネを見送るとき、アキオは石を一つ握って行きました。途中で出会った小学生のお兄

ちゃんが、アキオに小さな花をプレゼントしてくれました。すると、アキオは石を左手に、花を右手に持ち、ふっと柔らかな表情をしました。ネーネを含めて五人の小学生を見送った後、アキオは花をくるくると指で回しながら「ニイチャン、オハナ」と何度も言いました。そして、石を四つほど私に拾わせて握り、帰りました。ところが、帰り着いても用水路の所で止まらず、石を握ったまま通り過ぎました。そして、ベビーカーを降りるとき、

「ネーネ、オムカエ」

と初めて言ったのです。保育園の後に小学校の学童保育にお迎えに行くことを思ったのでしょうか。

そして、車に乗るとき、車の床にお花と一緒に石を置き、

「マッテテネー」

と言いました。アキオにとって、*“自分から離れ*

て手の届かない所へ行ってしまうナーネ」が、
「お迎えに行ったら会えるナーネ」に変化したように感じました。

そして、その次の日から、アキオは朝、私に石を拾わせなくなったのです。アキオにとつての生活が、新しい安定をもつて、展開しました。

このようなアキオの石とのかかわりは、「アキオは石にこだわっている」と言われるかもしれませんが。また、姉を見送るとき、ある種の儀式のようにも見えます。子どもとの生活の中では、そのようなこだわりと言われるようなものや、儀式的なものに多く出会います。一見同じことの繰り返しのように見えるその行動は、子どもにとつて、心の安定をつくり出す大切なことなのです。そうせずにはいられない、子どもの心が必要としている行動なのだと、アキオは私に教えてくれた

ように思います。

「子どもの行動は、子どもが心を感じている世界の表現である」と津守眞氏は述べています。そうであるならば、何がその行動に表現されているのか解釈することが、その子どもの心のありように近づく一歩となるでしょう。行動を解釈するとは、そこにある固有の意味を感じ、知ろうとすることともいえます。子どもによく見られる行動とするのではなく、その子どものその行動として見ることが求められます。そして、行動が心の表現であるからには、その心が形づくられてきた、その子どものそれまでの生活全体から、ある一つの行動をとらえることが重要といえるでしょう。

(四国学院大学社会福祉学部 子ども福祉学科)
引用文献

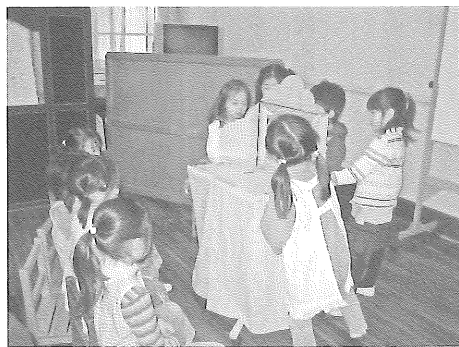
津守眞『保育の体験と思索』大日本図書 一九八〇年
五頁

保育の現場から

五歳児の三学期

く ゆっくりと表現を楽しむく

上坂元絵里



▲紙芝居劇場：読み手とめくり役が協力

五歳の四月に出会った子どもたち

海の組の子どもたちには、彼らが五歳の四月に、私は担任として出会いました。五歳から担任するのは初めてで、今までの暮らし方を子どもたちから伝えてもらいながらのスタートでした。

一学期、子どもたちは幼稚園で一番大きい組に

なったうれしさでいっぱいでした。手をつないで新入園の三歳児を遊戯室へエスコートしたり、降園前の片づけや身支度の手伝いに行く子どももいました。

園庭の竹やぶで見つけたタケノコでスープを作って小さい組にもごちそうしたり、野菜の苗を植えて育てたり、園外の農園に出かけてジャガイモ掘りをしたり、春から夏の季節を楽しみながら、いろいろ

な体験をしました。

二学期、クラスで力を合わせて綱引き、隣のクラスと混合チームでバトンをつないでリレーなどをしました。十月の運動会では、ひと回りたくましさを増しました。「前の大きい組みたいに、小さい組のために何かやってあげたいね」というY君の提案から、みんなで何度も相談しながら、五歳児の子どもたちがこれまで遊んできた遊び、劇や水族館、お化け屋敷やお店やさんなどをつなげて「こどもの国」を実現しました。

そして三学期、家庭では小学校入学に向けて用品の準備もすすみ、「もうすぐ小学生」「早く一年生になりたい」という期待感と、「もっともっと幼稚園でいっぱい遊びたい」「もう一年、幼稚園にいいかな?」という今への思いと、両方の気持ちを抱きながら、今という時間を惜しむように過ごしていました。

D 夫君の紙芝居劇場

二月下旬のある日、コート室でA子とB子が紙芝居を読んでいた。この「紙芝居劇場」は隣の山の組のC子がきっかけでした。前日に保育者が読んだ紙芝居を読もうとしていたC子に気づいた山の組担任は、「もう少し読みやすいのがあるわよ」と保健室の紙芝居棚を知らせ、そこで出会ったA子、B子らとそれぞれに選り、読み合った後、場所を移して小さい組に読んであげるようになりました。

私はその様子に気づき、「かみしばいを読むならD夫君も得意なんじゃない?」と同じ保健室にいたD夫に声をかけました。誘われて、紙芝居の棚を見にやってきたD夫にE子やA子が、あれこれと世話を焼いて選んだようでした。

翌日も紙芝居劇場は続きました。右手前方の立て看板には、「プログラム①かみしばい　むかしばな

し おおきなだいこん」と書かれていました。最前列には四歳児、二列目には三歳児、五歳児も含めて大勢が集まって席に着きました。

D夫が『おおきなだいこん』（ロシア民謡、川崎大治・作、教育画劇）を読み始めた途端に、昔話の世界にすっと引き込まれる感じがしました。抑えた声のトーンと「よいいしょ よーいしょ」のかけ声の軽快なリズムとのコントラストが効果的で、「おばあさんがおじいさんをつかまえた。たろうがおばあさんをつかまえた……」の繰り返しフレーズを調子よく読み進める間の取り方が絶妙です。どんどん早くなりそうなものですが、ゆったりとした早さを保ちます。「語り」と「呼びかけの言葉」「動物の鳴き声」など、声色も巧みに使い分けていました。紙芝居の読み手D夫を取り囲むように、F子、G子、H子、I子が立っていました。D夫が読むのを見守り、気持ち添わせてくれる一体感は、D夫

にとって心地よいものだったでしょう。自然に役割を分担し、最初はF子がめくる係で、めくり忘れるとG子が、あるいは反対側のI子がすつと手を出します。紙芝居舞台を使い、めくったり戻したりするのは結構難しいものの、D夫はゆつたりと待ちます。聞き手も、D夫の読みっぷりがなかなかなので、めくるのに間があいても待てるようでした。

読み終わると同時に、「もう一回読んで！」という声がかかりました。中には「知ってるお話だからつまんなかった」という声もありましたが、舞台脇に下がりながら、D夫が満足そうに笑みを浮かべたのが印象的でした。そしてD夫は、次の出し物、女兒のダンスの曲に合わせて手拍子をし、一番前の座席に座り、年少児と会話しながら見ていました。

D夫は絵本を読むのが大好きで、園では絵本が置いてある保健室で過ごす時間も多く、帰宅後もよく絵本を読んでいるとのことでした。語彙が豊かで、

友だちの状況を巧みに代弁したり、上手に説明をしたりする姿が見られ、本を読むことを通して言葉を豊かに蓄えていると感じてはいました。けれども教師としては、小柄で体の動きがぎこちないことや友だちとかかわるのが苦手なことのほうが気になり、縄とびや鬼遊びに誘ったり、一緒に遊びながら動き方をアドバイスしたりすることを心がけていました。

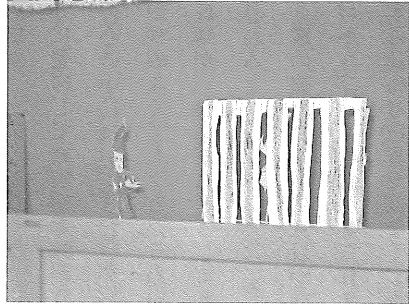
三学期のこの時期、ほかの子どもが始めた「紙芝居劇場」という遊びを機に、D夫は、得意な力を存分に発揮して充実感を味わうことができました。私の心の中には、「今の時期にそれほどすらすらと字が読めなくても」という思いもありました。TTの教師が「D夫君はどうしてあんなに読めるの?」と尋ねると、「だつてここに書いてあるじゃない」と、下欄の演出ノートにも目が向いていたらしいことがわかりびっくりもさせられました。とはいえ、すらすら読める技量ではなく、物語の世界を楽しむ豊か

な自分の世界をもっていることが、今回の経験につながったと感じます。

紙芝居の終盤、見ている子どもたちに「さあ、みなさんも いっしょに、よいしょ……」と、呼びかける場面がありました。そこに「さん、はい」というアドリブを入れて、見ている子どもたちと「よいしょ よいしょ……」と声を合わせる場面は本当に素敵でした。一人で絵本を読む時間の積み重ねのうえに、読み手として相手に伝える、友だちにサポートされる、見ている人と声を合わせる、幾つかの心地よい体験が重なり、きつと自信につながったであろうと感じた遊びでした。

「J」子のペープサート

三月中旬、卒業式まであと数日のある日、女兒数人が保育室で、自分たちが作ったペープサートで人形劇を始めました。このペープサートはだいぶ以前



▲ペープサート：魔女につかまり姫は牢屋に入れられた

に、作っただけで満足してしまったのかしら？」と私は少し残念に思っていました。

王子様を作ったF子が「もうすぐ幼稚園が終わっちゃうから、早くやらなくちゃ」と突然言いだし、一緒にやることになったJ子らとついでを出し、椅子を並べてすぐにも上演しようという勢いです。私を知る限り、ストーリーを友だち同士で考えていた様子も見受けられず、「えっ、突然始めて、人形

に作っていたもので、厚手の紙を使い、クレヨンで塗り込み、なかなかの出来でした。ところが作ったまま置かれていて「とても素敵なの

劇になるのかしら？」と不安に思いつつ見守っていました。

始まってみると、J子が中心人物になってストーリーを考えながら、声色を変えて話します。

ある日、魔女がやってきました。でもお姫様は、魔女を知らなかったのです。

魔女「こっちへ来てごらん」

牢屋にお姫様はつかまってしまいました。

お姫様「何でこうなるの」

魔女「おまえがだまされたからいけないんだよ」

お姫様「えっ、だまされた!」

魔女がけらいを呼びました。

魔女「姫が逃げないように見張っておくんだ!」

(強い口調で) あっはっは(威嚇するように)「

けらい「はい。わかりました(おびえた感じで)」

お姫様「助けて! 助けて!」

そこに王子様がやってきました。

シャキーン シャキーン

王子「姫 大丈夫か？」

お姫様「大丈夫です。でも……」

魔女「何をするのじゃ！」

そこで魔女に見つかって、王子は魔女とたたかいました。今度は魔女がつかまってしまいました。

魔女「何でこうなるんだ！」

その後、お姫様はお城で幸せに暮らしました。

おしまい。

一回目が終わると、一緒にやっていたG子やF子から不満の声があがりました。「J子ちゃんばかり言うのずるい！」と。そう言われて二回目は、J子は一步引いてウロウロしながら言いたいのを我慢して見守りました。やってみると、J子がセリフを言うようにはうまく進みませんでした。何となくJ

子が復活して三回目を演じました。

急な人形劇上演は、J子の牽引力に負うところも大きかったものの、J子のストーリー展開に合わせ、人形や城、牢屋などを動かす仲間がいるからこそペープサートが実現しています。結局、J子が中心で進んだものの、途中で不満を表明し、やりとりしたプロセスには、とても意味があったと感じました。同じクラスの子どもが最前列で食い入るように見ていたり、どちらかというと批判的なK夫が、「本物の人形劇みたいだったね」と声をかけていた姿もうれしいものでした。

幼稚園の一年間という生活サイクルの中で、三期の楽しさというのがあると改めて感じています。五歳児の三学期に、これまでの遊びとつなげて一生懸命遊んだ満足感、そこで得られた自信は、新たな生活に向けてのエネルギーにもなったと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

「お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(25)」

ミュンヘン市の幼保をつなぐ実践

—〇〇六歳の幼保一元的施設—

幼保小統合的保育者養成校の視察報告—

浜口 順子

フランクフルト・アム・マイン中央駅から特急で三

時間余り、ミュンヘン中央駅に着いた。二〇〇八年三月中旬。イースター直前に当たり、訪問先の保育施設では、卵やウサギをテーマにした壁面構成や飾り付けによく出合った。春の訪れが早かったのか、ソメイヨシノよりは小ぶりの桜やレンギョウの花が街角をささやかに彩っていた。

この旅の前半、フランクフルト市で、幼保小の保育一元的施設であるKITAと、同市のユニークな陶冶(Bildung)ネットワークプログラムの実態を視察

した。

これについては、大戸美也氏が二〇〇八年十一月十二月号の本誌ですでに報告されている。今回、私はその後に訪問したミュンヘン市の、幼保一元的施設と保育者養成機関についてお伝えしようと思う。

ミュンヘンは、ドイツ東南部に位置するバイエルン州の州都で、ベルリン、ハンブルクに次ぐドイツ第三の都市(人口一三五万人)として、南ドイツの政治・経済・文化の中心である。現代的な高層ビル街と古い町並みが共存するフランクフルトに比べ、ミュンヘン

は歴史と伝統を深く残した街という印象だった。治安も比較的よいそうである。ミュンヘン市郊外のハール町に住み、ミュンヘン市の公立幼稚園で先生をされているベルガー・有希子さんに今回通訳と案内をお願いしたが、母親として家族と暮らしていて「ミュンヘンはとても生活しやすい」と言われていた。

幼保一元的施設 (Koop) 「蝶ちよ園」

ミュンヘン中央駅から電車で二十分程、ラグヴィド駅に程近い静かな新興住宅地の中にある幼保一体型の施設 (Kooperationseinrichtung ≡ 略称 Koop) 「蝶ちよ園」を訪問した。ここでは、生後九か月児～五歳児の縦割り保育が実践されている。ちょうど十年前(一九九八年十二月)に設立された市営施設で、きれいなライトブルーの外壁にきらきらと何匹かの蝶の装飾が施され、清潔でやさしげな風情を醸しだしている。

バイエルン児童教育法に基づくミュンヘンの保育関連施設にはいろいろな種類がある。ドイツは州によつ

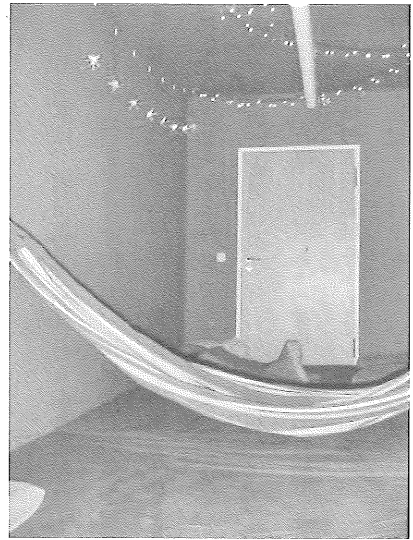
て政策の自立性が高く、教育制度も一律には語れない国だ。大戸氏のフランクフルト報告で「幼保小の保育一体化施設」として紹介されたKITAも、ベルリン、ハンブルグといった都市部では中心的な幼児教育施設であるが、ミュンヘンの施設種類一覧表にKITAではなく、同様の機能をもつ施設として、KITZ (Kinder Tages Zentrum) というものがある。蝶ちよ園の副園長ハウエル先生に何うと「KITAのことは知っている」とのこと。「ドイツの保育」と一括りに語れそうもないことを実感した。

蝶ちよ園は、満三歳までの子どもを日中保育する乳児保育所 (Kinderkrippe) と、三歳からの就学前の子どもとの教育・保育・養育を担う幼稚園 (Kindergarten) を一体化させた施設だという。「バイエルン陶冶」と呼ばれる保育の内容は「メディア」「創造性」「音楽・リズム」「身体表現」「自然とモノ」という五つの陶冶領域を中心に、発見的学び、生活、自立性を見据え、自由遊びを中心としつつ、多様なグ

ループ構成による設定保育、年間テーマ・季節行事を盛り込んだカリキュラムが展開されている。

蝶ちよ園には一三六人の子ども（そのうち生後九か月～三歳まで三十六名）が在籍する。横長の二階建ての建物の左・右ウィングの一階と二階それぞれで、四つの「おうち」（縦割りグループ）に分かれて生活している（三十九人グループが二つ、三十八人と二十人が一つずつ）。移民の子どもは比較的少ない園だったが、フランクフルト同様、多数の移民の子どもを抱える園も少なくないという。

開所時間は、朝七時から夕方五時までの十時間である。八時～朝食・自由遊び。九時半～自分の「おうち」に集合して、朝の会・子ども会議。十時～設定・自由・庭遊び、フルーツ・おやつ。十二時～一緒に昼食。一時～お休みの時間（乳児は午睡の部屋へ。幼児中期は「ごろごろする部屋」でお話を聞く。就学前児は各階の一つの部屋へ。睡眠中の子どもは起こさないことが原則。二時ごろ～早帰りの子は降園。二時半



▲写真1：「ごろごろする部屋」

～自由遊び。迎えが来たら帰る。四時半～遅番保育者が残りの子どもの世話。

私は建物の右手一階の「おうち」を主に見学したが、定員三十八人の子どもに対して五人の担当保育者が付くグループだった。「おうち」には幾つかの部屋（保育室二つ、少し狭いが落ち着いた上下の空間を組み立て材で区切った部屋（午睡も可能）、アトリエ）があり、廊下にも幌布を掛けて落ち着いた空間をつくる工夫がなされ、広さは充分といえよう。

興味をもったのは、広さ三畳ぐらい、部屋いっぱい
にマットレスが敷かれ、薄暗く、天井や壁は星空のよ
うな雰囲気にしてある「ごろごろする部屋」だ（写
真1）。午睡もできるが、好きなときに入ってごろご
ろできる場所なのだそうだ（そのほかに、全「おうち」
が共同利用する工作室、体育室もある）。

これならば、〇〇五歳の子どもたちが縦割りで一つ
のグループになっても、遊ぶ、食べる、寝るの生活
を、それぞれの子どものペースを大切にして組み合わ
せることができそうである。実際二時間見学してい
た間でも、一人ひとりの子どもやりたい遊びが多様な
空間で繰り広げられていた。たとえば、十時ごろ比較
的大きな子どもたちが軽食の準備に入ると、いつの間
にか（と感じる程自然に）、〇〇一歳の子どもたちは
別の部屋で、補助の保育者とゆっくり過ごしていた。
保育者同士の連携がうまくいっているのである（時
間によって、年齢別の活動や「おうち」の枠を超
えたプログラムが計画されている）。

日本で一歳から五歳までの縦割り保育をする施設を
見たことはあるが、今回、〇歳からの縦割りを見て、予
想以上に生活が自然に流れているのに驚きを感じた。
朝の集まり「子ども会議」（写真2）では、点呼を
取ったり、今日は何曜日か、一日の予定や流れについ
て話し合ったりする。その間、小さな子どもは抱っこ
されていたり、車座の真ん中に出てきたりしているが、
一人ひとりの
子どものペー
スを見守る余
裕が保育者に
も子ども同士
にもあり、全
体に落ち着い
た時間だっ
た。

ゲームをし
たり、レール



▲写真2：朝の集まり「子ども会議」風景

遊びをしたり、廊下でゆったりと過ごしている子どももいる。小雨が降っていたのだが、外で遊びたい子どもはレインコートと長靴を履いて園庭の砂場で遊んでいた。

「おうち」を越えた年間プロジェクトとして、「私たちの町ミュンヘン」と題する掲示（市内で撮ってきた写真を貼った手作りの地図や、市の紋章である僧侶のマークをかたどった織物の作品など）が、園内全体の至る所で目を引いた。開市八五〇周年に当たる今年の特別な取り組みで、この準備のために一月に保育者たちが一日有給で合同研修をしたという。ミュンヘンが、ザルツブルク周辺で採れる塩の交易拠点として栄えたという史実に因んで、市内見学の際に子どもたちは塩を持っていき、町の所々に置いてきたのだそうだ（保護者も可能な範囲で一緒に参加したという）。小さな子どもも、塩を置くという身体的活動を通して、ただ話を聞くのとは違う経験を心に刻みつけたに違いない。身体的な学びを目指す陶冶（Bildung）学習の発

想であろう。

副園長と話していて、いわゆる「慣らし保育」、つまり入園時の適応にかかわる対応についての理論と方略がしっかりと位置付けられており、家庭との連携への配慮の厚さがうかがわれた。親と共に子どもが園に慣れていく期間と、親子が共に納得して離れていく期間とが段階的に考えられている。

「慣らし保育がうまくいくと、永続的な信頼関係のための基礎ができ、しっかりと安定した『自分は価値があるんだ』という気持ちの前提になる」

「大切なのは、両親が子どもを預けたいという、はっきりした自覚をもって子どもと別れることである」

（園のしおり）より／ベルガー・有希子訳）

幼・保・小の統合的保育者養成

—ミュンヘン応用科学大学—

次に、ミュンヘン応用科学大学に二〇〇七年秋に新設されたばかりの幼年期陶冶教育学科（Bildung und

Erziehung im Kindesalter)の主任教授レヒナー(Prof.

Dr. Helmut Lechner)氏を訪ねた。私はその学科が、

ドイツで初めての「保育者(社会的教育者)養成」を目的とした高等教育機関(二年間学士課程)であるう
えに、〇〇十二歳までという長いスパンの子どもを対象とした一貫した保育者養成カリキュラムをもつことに関心をもった。

ドイツでは一般的に幼児教育と小学校の学童保育にあたる部門は州の福祉関連省庁が統括しているが、ミュンヘンのあるバイエルン州では唯一、伝統的に文部省が管轄しているという特殊状況にも関係しているであろう。

レヒナー氏によると、日本と同様、ドイツでも子育てを難しいと感じる女性が増えており、またPISAショック(OECDが行う十五歳学習到達度調査で、二〇〇一年ドイツは三十二か国中二十一位だった)の影響もあり、社会的な教育格差を是正するために社会で子育てをするという意識が高まってきているそう

である。

ドイツの学校は半日で終わるので、なお一層、学校以外の時間の過ごし方が子どもの育つ環境において重要であり、充実した教育プログラムが求められるようになったと考えられる。学校の補習をするような保育施設もあるが、むしろ、自らの身体を通じた発見的な学習としての陶冶(Bildung)をじっくりやろうとする傾向が強いという。

環境的な接続に対する研究は、ベルリンやミュンヘンにおける幼児教育研究機関で重点的に研究されており、知識注入や大人主導の狭義の教育(Erziehung)ではない、自己陶冶的な活動(Bildung)が着目されている。子どもの情緒の基本的な安定を図り、攻撃性などの問題を予防的に解決したいという意図も少なからずあるようである。

(お茶の水女子大学 大学院人間文化創成科学研究科
人間発達科学専攻幼児教育・保育人間学)

編集後記

読者の皆様、あけましておめでとうございます。新しい保育所保育指針と幼稚園教育要領が実施される年となり、家庭・保育所・幼稚園などの乳幼児の育ちの場と地域・社会、義務教育の場などがどのように協働していけるのか問われ直す時代、『幼児の教育』は創刊108年目を迎えます。目先の問題に振り回されすぎずに踏みとどまり、小さな子を育てることの楽しさ、おもしろさ、希望について語り合えるような雑誌にしていきたいと思います。

今号は、表紙もカットも一新、「子どもと新年」を特集したほか、新連載が4本、と新しモノ満載です。ネット公開中の往年の『幼児の教育』（戦後の続編も更新準備中です）と併せ、本年もどうぞよろしくお願いたします。

(H)

幼児の教育 第108巻 第1号

平成21年1月1日発行

編集兼発行人 浜口順子

編集部 永山 綾

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所 株式会社 フレーベル館

☎03-5395-6604（編集）

振替 00190-2-19640

印刷所 図書印刷株式会社

定価 550円（本体524円）

©日本幼稚園協会 2008 Printed in Japan

表紙絵 ヨシエ

扉カット ヨシエ

扉題字 津守 眞

カット 田崎トシ子

編集委員 上坂元絵里

高橋陽子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。

☎03-5395-6613（営業）

次号予告

新連載 子ども文化の詩学（1） 森下みさ子

・園長のまなざし（2） 菊地妙子

・保育の現場から「心弾む日々を重ねて」 阿蘇亜希

・「わざ」の世界から学ぶ 川口陽徳

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開が始まりました！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"

<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。

明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。

ご意見ご感想などは、youjimap@yahoo.co.jpまでお寄せ下さい。

保育に活かせるアンパンマン新シリーズ誕生

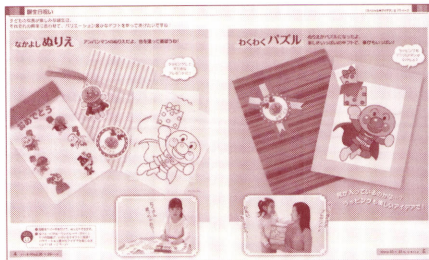
手づくりアンパンマンといっしょ②

かんたん ギフト

千金美穂
尾田芳子
あかま あきこ／著

子どもたちに大人気のアンパンマンを手づくり作品で楽しむ実技書。「誕生日」「母の日・父の日・敬老の日」「入園・進級」「お別れ会・卒園」など、記念日に贈るギフトを紹介しています。幼児教育研究家・齋藤二三子先生主宰【乳幼児の遊び研究会】からの保育や子育てに活かせるアドバイスを掲載。カラー型紙付き。

26×21cm 80ページ 定価 1,995円(税込)



10902

期待の
タイトルも
続刊!!

好評発売中

わくわく☆おもちゃ



10901

近刊

エプロンシアター®



10903

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

フレーベル館 創立100周年記念出版

幼児教育とともに歩んできた100年
そして未来の子どもたちを支える100年に

THE保育-101の提言-vol.2

無藤 隆 編著

各界きっての賢者たちが鋭い視点で
保育の未来を読み解きます。これか
らの保育のあり方を考え、保育の質
を高めていくために必読の1冊です。

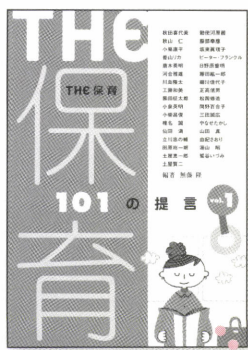
執筆 者(50 音順)――

赤池 学(ユニバーサルデザイン総合研究所所長)、
アグネス・チャン(歌手)、与 勇輝(人形作家)、足
立直樹(凸版印刷(株)社長)、天野 嘩(小児科医)、
池谷幸雄(元オリンピック体操選手)、石塚克彦
(脚本・演出家)、稲村なおこ(童謡歌手)、岩谷徹
(ゲームデザイナー)、漆原智良(作家)、大谷恭子
(弁護士)、陰山英男(立命館小学校副校長)、小
嶋勝衛(建築学者)、紺野美沙子(女優)、佐藤可
士和(アートディレクター)、佐藤 学(教育学者)、
志村季世恵(セラピスト)、炭谷 茂(元環境省事
務次官)、富田リカ(モデル)、中西弘子((株)ポー
ネルンド社長)、野沢綾子(ホリスティック・コネ
クション代表)、ピーター・バラカン(ブロードキャ
スター)、肥田美代子(文字・活字文化推進機構
理事長)、福島智(バリアフリー研究家)、福原義
春((株)資生堂名誉会長)、本田 亮(環境マンガ
家)、増井光子(よこはま動物園ズーラシア園長)、
三浦勇夫(精神科医)、村上康成(絵本作家)、柳
生 博((財)日本野鳥の会会長)、義家弘介(参議
院議員)、米村でんじろう(サイエンスプロデュ
サー)、鷲田清一(大阪大学総長)



10502

26×19cm 214頁 定価 2,100円(税込)



【豪華執筆陣】
小柴昌俊(物理学者)
椎名誠(作家)
田原総一郎(ジャーナリスト)
服部幸應(料理評論家)
坂東眞理子(評論家)
日野原重明(医師)
やなせたかし(絵本作家)
ほか多数

vol.1
好評発売中!

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五一四円) ☆